

毎週水曜日夕、札幌市教育文化会館(中央区北一西13)で「授業」が行われる。集う生徒やスタッフは和やかな雰囲気ながらも真剣そのもの。その表情から学ぶことの喜びがこちらにも伝わってくる。自主夜間中学「札幌遠友塾」を紹介する。

(町田誠也)

札幌遠友塾には現在、戦争や家庭の事情などで学校に行けなかった人、生活するうえで不便を感じ、基本的な勉強をもう一度やり直したいという人など約90人が集まり、四つのクラスに分かれて学んでいる。

この日の3年生のクラスは日常会話を英語で表現する授業の真っ最中。生徒はその大半が高年の人で、熱心にメモを取ったり、講師に質問したりと非常に意欲的だった。

「この学校を始めてみて、学びたいと思っている人がたくさんいることに驚いています」と代表の工藤慶一さん(58)(豊平区)は語る。学生時代から教育問題に強い関心を持っていた工藤さん。新渡戸稲造の教育理念を理想に、1990年に札幌遠友塾をスタートさせた。それから17年、ここで学んだ生徒は300人を超える。

「最初は入学者がいるかどうか



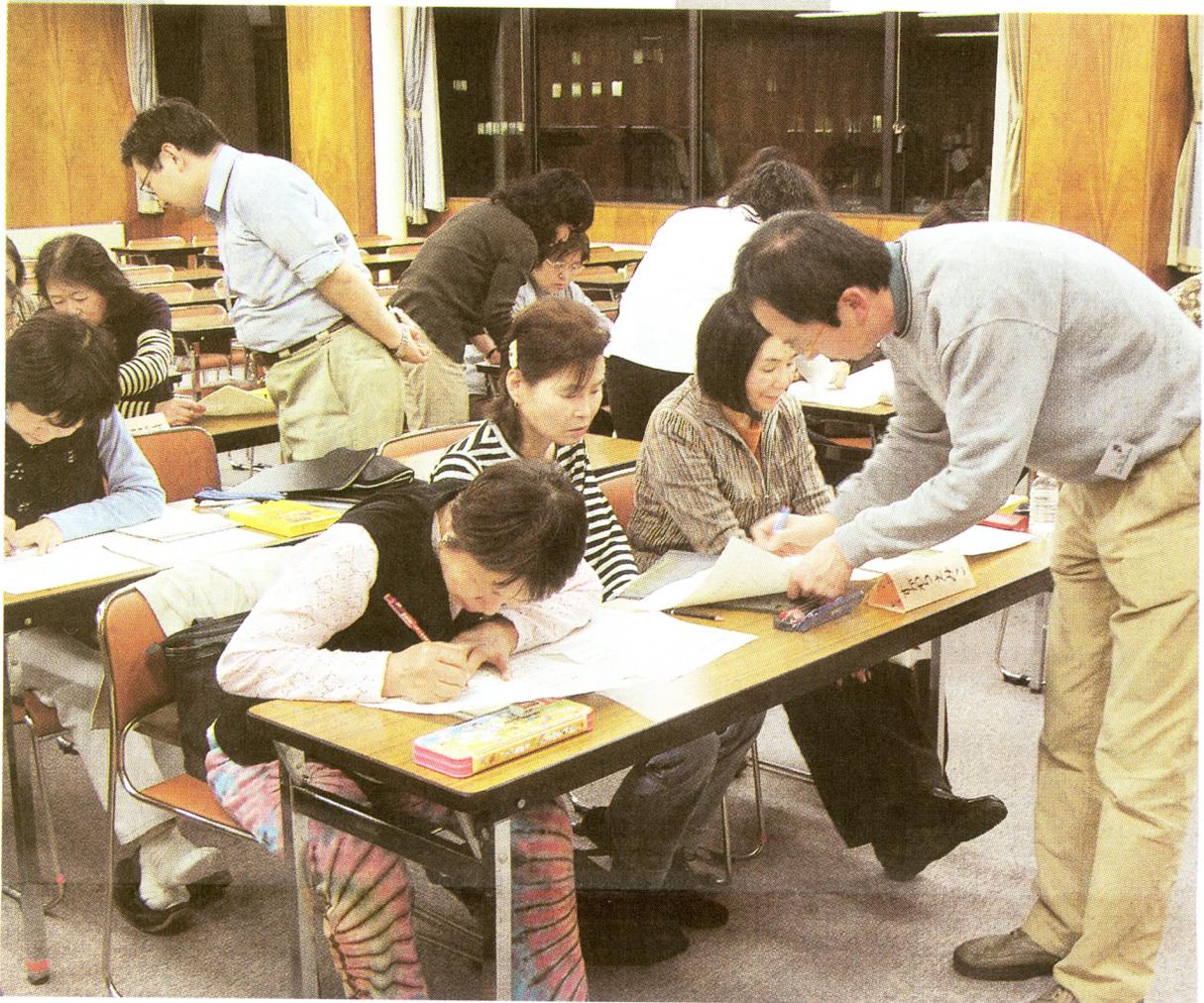
か不安でいっぱいでした。でも初日から問い合わせの電話が鳴りっぱなしで」。現在は支援の輪が全国まで広がるようになった。工藤さんの思いは少しずつ実を結んでいる。

登録しているボランティアスタッフは約70人。主婦や学生、会社員など、その顔ぶれは様々だ。

井上美恵子さん(68)(東区)

再び 学ぶ喜び

自主夜間中学
札幌遠友塾(札幌市中央区)



もその一人。会計担当の井上さんは、実は札幌遠友塾の第一期卒業生だ。

「生徒だった3年間で欠席したのは2回だけ。それが結構、自慢なんですよ」と語る井上さん。

「自分探し」のために始めた遠友塾での勉強だった。スタッフの丁寧な対応に心打たれた

と言う。卒業後、恩返しの意味も込めて自らもスタッフに。生徒と共に、今でも学びの気持ちを味わっている。

「私が生徒の時、先生方は、『どうしてこうなるのか』まで熱心に教えてくれました。だから理解できた時の喜びが大きかったです。その気持ちをたくさんの人に知ってほしくて……。そう言ったら、井上さんは静かにほほえんだ。

工藤代表を始めスタッフの願いは、自分たちの校舎を持つことだ。そのため、公立の夜間中学校設立を札幌市に要請中という。

「札幌遠友塾は私のライフワーク。長い人生の中で、『これだ』と思えるものに出会うことはなかなかないですから。目標の実現のため、今後も活動していくだけです」。穏やかな口調の中にじむ強い決意。工藤さんの言葉が印象的だった。

「自主夜間中学 札幌遠友塾」のサイトは、<http://enyujuku.com/>

▲ 英語の授業風景。生徒の熱意にこたえようと、講師も汗だくになって授業をしている。